忍法 · NINPŌ

忍法 — 影から光へ

私の歩み、生き甲斐、そして戸隠流忍法への想い

Jérôme Pailliette– Ninjutsu Kyoto · 京都

私が武道を始めたのは、自分の身を守るためでした。やがて忍法は、稽古と探求、判断力を養い、次の世代へ伝える道となりました。これは私自身の体験と考えであり、他者に一つの答えを押しつけるものではありません。

01 自分の身を守ることを学ぶ– 幼少期の影

私はパリ郊外、ヴァル＝ド＝マルヌ県フォントネー＝スー＝ボワの公営集合住宅（HLM）の団地で育ちました。貧困や暴力への不安、脅迫や金品を脅し取られる恐怖が身近にありました。父は不在で、母は私と弟を厳しい経済状況の中で育てていました。

生活を十分に支えることが難しくなり、私たち兄弟は当時のフランスの児童福祉行政機関DDASSの保護下に置かれました。里親家庭での虐待、親からの愛情や保護を十分に受けられない寂しさ、そして弟と離れ離れになる苦しみを経験しました。ここでは、そのすべてを詳しく語るのではなく、私の歩みの背景として記しておきたいと思います。

私は幼い頃から、自分の身を守り、耐え、生き抜くこと、そしてできる限り弟を守ることを考えていました。学校でのいじめや同級生による暴力も、その思いを強くしました。8歳で空手を始めたのは、段位や試合のためではなく、自分を守る術を身につけるためでした。

こうした苦しみは正当なものでも、成長に必要なものでもありませんでした。それでも、この経験は私の性格に深い影響を残し、いつかより良い日々が来ると信じる意志を育てました。当時はまだ、身を守るための武道が、生き方を学び、やがて人に伝える道へとつながるとは知りませんでした。

02 7年間の空手と忍術との出会い

私は7年間空手を続け、茶帯まで進みました。しかし、黒帯の取得だけを目指して昇段審査の準備を続けたいとは思いませんでした。当時の私が経験した型や競技規則には制約を感じ、つかみ、制御、投げなど、より幅広い身体の使い方を学びたいと考えていました。

1988年、ショー・コスギ出演のアクション映画などを通じて、忍者の武術である忍術の存在を知りました。最初の関心は映画がきっかけであり、伝統について深く理解していたわけではありません。経済的な事情からすぐには始められず、実際にシルヴァン・ギンタール氏（初見良昭先生の門下生）のもとで稽古を始めたのは1989年でした。

私を引きつけたのは技術の多様さだけではありません。ギンタール氏は修験道も実践しており、その一部を自身の指導に取り入れていました。この精神的な側面は、初見先生から受け継がれる武術の指導内容と区別すべきものですが、身体と内面の両方を探求したいという私の願いに響きました。

03 先生方との出会い、そして生活の場となった道場

1990年代初め、ギンタール氏が日本へ渡った後、私は弟子のアルノー・クセルグ氏のもとで約2年間稽古を続けました。その後、1年間の兵役を終えて戻ると、指導者はサミール・サード氏に代わっていました。私は1998年まで同氏のもとで稽古を続けました。

サード氏は、私に子どもたちを指導する機会を与えてくれました。また、住む場所がなかった時期に、道場の責任者の許可を得て、そこで生活できるようにしてくれました。道場は稽古の場であるだけでなく、暮らしと責任を学ぶ場所にもなりました。その心遣いには今も感謝しています。

1998年に氏が突然アメリカへ渡り、私たちはそれまでの指導者を失いました。こうした変化の中で、先生方への敬意とともに、教えられる理念と日々の行動との間に私が感じた違いについて考えるようになりました。見せかけの姿と、本当にそう在ることの違いを意識するようになったのです。

04 源を求めて– 日本への道

私は長い間、本物の師と出会うことを夢見ていました。稽古、言葉、行動が一致している人です。その思いが父の不在と関係していたのかもしれないと考えたこともありますが、それだけで自分の人生を説明できるとは思いません。また、いつか日本で生きるのではないかという感覚も持っていました。印象に残る夢や人から聞いた言葉もありましたが、これらは私個人の体験であって、予言が証明されたという意味ではありません。

1999年、初めて日本を訪れ、初見良昭先生にお会いしました。当時の私は、まだ日本語で自分の考えや悩みを十分に伝えられるほど流暢ではありませんでした。2003年と2004年に再び来日しました。2003年の滞在では、初見先生から直接、四段の認定証をいただきました。年号と段位は、私の歩みにおいて大切な事実です。

日本語の勉強、初見先生との交流、日本語文献の読解を通じて、言葉や教えの微妙な意味を徐々に理解できるようになりました。その頃から、特定の先生がそばにいるかどうかに左右されず、忍法を探求し続けたいと思うようになりました。自分で聞き、見て、学び、稽古で確かめたかったのです。

2006年11月、私は日本に生活の拠点を移しました。京都は、今も探求を続け、人に伝えることを選んだ場所です。

05 段位、殺気試験、そして私の選択

2003年と2004年の訪日中、武神館の五段に関わる殺気試験を見学しました。正座した受験者が背後からの打撃を避ける試験です。私が見た中には、結果についての自分の認識と昇段の判断が一致しないように感じた場面もありました。これは私自身の観察と評価であり、判断に至るすべての事情を知っているわけでも、受験者全員について述べているわけでもありません。

殺気試験は、技術全般を審査する試験として設計されたものではありません。だからこそ、そこで認められた段位を、基本技術のすべてを修得した証明として受け取るべきではないと私は考えました。また、一つの試験では測れない誠実さや責任感を、どのように考えるべきかという疑問も抱きました。

日本に定住してから、私自身にも五段の殺気試験を受ける機会がありました。しかし、私は受験しないことを選びました。段位だけでは技術力、判断力、内面的な成長を十分に示せないという、自分の信念に従った選択でした。

私は、肩書きや段位と、実際に示された能力との間に隔たりを感じる指導者に出会ったこともあります。しかし、その経験を武神館全体への一括した評価にするつもりはありません。そこで学んだ知識を大切にしながら、組織的な認定との距離の取り方を自分で選んだのです。

06 見せかけではなく、真実と誠実さを求めて

私が大切にするのは、真実、本物であること、心からの誠実さです。段位には指導上、組織上の役割があるでしょう。しかし、稽古そのものや、努力によって得た理解の代わりにはなりません。身体操作、間合い、適応、観察、環境、対処、自己制御など、忍術の領域は非常に広く、一つの段位制度ですべての深さを表すことはできないと感じています。

宮本武蔵の歩みは、私に自ら武を探求する姿勢を考えさせてくれます。自分を武蔵になぞらえるつもりはありません。ただ、その姿勢から、名声より日々の稽古を大切にしたいと感じます。栄誉や他人の評価を、自分の価値の尺度にしたくはありません。

私が思い描く忍びには、立派な名や肩書き、社会的地位が必須ではありません。学び続け、言葉と行動を一致させようとすることが大切です。何者であると名乗るかより、どう在るかを重んじたいのです。

07 忍法、信仰、生き甲斐

真言密教への信仰、大日如来への帰依、修験道への関心は、私の歩みに寄り添ってきました。ただし、これら個人の信仰と、戸隠流忍法の技術的・歴史的な教えは区別しています。すべてを一つの教義であるかのように語ることは適切ではありません。

私は自分の本質、私が「高次の自己」と呼ぶものへの理解を深めたいと願っています。悟りを得たと主張するものではありません。私にとって武道を通じた目覚めの道とは、注意深さ、明晰さ、自己制御、責任感を育み続ける探求です。

忍法は、私の生き甲斐の大切な一部となりました。生き抜こうとしていた少年は、将来、稽古し、学び、人に伝えることに人生をかけるとは想像していませんでした。「影から光へ」とは、過去を消すことではありません。過去を抱えながら歩み続け、経験を責任へと変えていくことです。

08 京都で守り、学び、伝える

私の経験において、戸隠流忍法には、日々研究し実践できる多様な技術と原理があります。私はこの伝統を、自分にとって真実味のあるものとして大切にし、守り伝えたいと思っています。これは修行者としての私の信念であり、他の忍術伝統が一切本物ではないという歴史的証明ではありません。史料で確認できる事実、受け継がれた伝承、個人の解釈を分ける姿勢が必要です。

京都では、身体操作の基本、具体的な稽古、適応力、物事を見極める力を重視して指導しています。生徒には段位を仰ぎ見たり、誰かの言葉をそのまま繰り返したりするのではなく、自らの力を養ってほしいのです。教える側が、まだ知らないことを認めるのも大切だと考えます。

私は、真実、心からの誠実さ、正義感を大切にする人々に語りかけたいと思っています。他者に信念を押しつけたり、誰かを無知と決めつけたりするのではなく、自分で観察し、問い、確かめる手がかりを共有したいのです。

守る。学ぶ。伝える。これが私の歩みの中心です。忍法のすべてを理解したと主張することなく、今も自分自身の修行を続けています。身を守る必要から始まった武道は、長い年月を経て、生き方となり、人に分かち合う理由となりました。

守る・学ぶ・伝える

Jérôme Pailliette ¦ Ninjutsu Kyoto ¦ Togakure Ryū Ninpō